

# エゾノリュウキンカ

*Caltha palustris var. barthei*

キンポウゲ科



エゾノリュウキンカ

## 名前の由来

「蝦夷」は北海道に分布することから、「立金花」は茎が立って黄金色の花をつけることからついた。また北海道では谷地に生え、フキの葉に似ているところからヤチブキ（谷地蒨）ともいわれる。アイヌの人たちは、エゾノリュウキンカの根を食用や薬用として多用していたことから、その根を指す「プイ」という言葉がある。

漢字名：蝦夷立金花

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）草花

（外来種）草花

哺乳類

（水辺）鳥類

（草原）鳥類  
（タカ）

## 形態的特徴

高さ50～80cmで茎は直立し、太く軟らかい。根元からのびる根出葉には長い柄があり、腎形で大きく、縁には細かい鋸歯がある。花茎につく葉の柄はごく短い。花は鮮黄色で

径3～4cm、5枚の花びら（花弁）状のがく片をもち、茎の頂に多数つく（集散状に6～10個）。

## 類似種と見分け方

エンコウソウ。

エンコウソウは、エゾノリュウキンカより小型で、茎は直

立せず地面を長く這う。また、花はややまばらについている。



エゾノリュウキンカの花



類似種のエンコウソウ



エゾノリュウキンカ。株はややかたまる



エンコウソウ。茎は長く這う

## 生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期		■										
結実期		■										

## 生育環境・分布

低地から高山の溪流沿い、水中、湿った草原や湿地などに群生する。

**分布：**国外分布は、樺太・朝鮮北部・ウスリー・千島など。

国内分布は、北海道から本州北部。

北海道内分布は、全道。

十勝地方では、低地から高山の溪流沿い、水中、湿った草原や湿地などに群生する。



エゾノリュウキンカ。流れの近くでよく見られる

## 生活史

**開花時期：**4月下旬～7月

**開花までの年数：**不明

**寿命：**多年草。

## 他生物との関わり

花には虫が訪れる。

## 興味深い話

■山菜として若い葉、葉柄、花、花茎が食べられ、くせない味と歯ざわりが好まれる。大きくなるにつれ苦味も増すので、よくゆでて十分に水にさらして苦味を抜いたあと、おひたし、ゴマあえ、煮物などにするとおいしく食べられる。

■採取する際は、多数採取することは控え、同じ1株でも葉や茎を全部採取せず、間引くように採取したい。

■十勝地方のアイヌ語では「パイ」という。

■アイヌ語では特に食用とされる根を指してパイと呼ばれ、エゾノリュウキンカの茎はパイラと呼ばれるともいう。

■アイヌの人達は薬用として根を煎じた汁で火傷や創傷を洗ったり、根を患部に当てて治療に用いたという。また宗谷地方のアイヌの禁忌として、「炉火の中へ谷地露の根は入れぬこと」とあり、エゾノリュウキンカの根を焼いて異臭をたてることは、悪い神が訪れることだという。

■アイヌのフチ（お婆さん）たちによると、「春一番に茎を食べた」「クマの肉とともに茎を煮て食べた」「茎をオハウ（汁）に入れた」「葉と茎をとって食べた」といい、また夏には根を掘って「煮て食べたり、筋子にまぶして食べた」「根からでんぷんをとり、団子にしてつぶしてチポロ（筋子）をつけて食べた」という。

■エゾノリュウキンカの根を掘る棒をパイタウライニ（エゾノリュウキンカの根・掘る・棒）といい、先端をとがらせた60cmくらいの棒だという。後志の古宇川筋にパイタウシ（エゾノリュウキンカの根・掘る・所〈群生している〉）という地名が、また積丹のシュシュナイ川筋にパイタウシユペツ（エゾノリュウキンカの根・掘る・川）という地名が残っているという。



エゾノリュウキンカ

## 配慮事項

生育している環境全体が重要である

### 参考文献

「改訂版 牧野新日本植物図鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本Ⅱ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「森林で遊ぼうシリーズ3 おもしろい草花の話」北海道立林業試験場 北海道林業改良普及協会 1998

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・タカ）  
鳥類  
樹類